

子どもの創造性を育む造形環境

研究代表者：寺川剛央（和歌山大学），大学共同研究者：永沼理善（和歌山大学）

共同研究者：西原有香莉（和歌山大学教育学部附属小学校）、笠原 彩（和歌山市立楠見東小学校）、南洋平（和歌山県立粉河高等学校）、丸山夏矢（和歌山市立浜宮小学校）

1. 研究の目的

子どもは、幼い頃より感性をとおして身の回りの環境と関わり、世界の認識を形成していく。図工科教育において、取り分け、土遊びなどのような造形遊びの中では、全身の感覚を働かせた感性の教育が行われている。この造形遊びは、自発的な学びを特徴としていて、つくり出す喜びを味わうと共に、形や色を思いついたり工夫したりしながら、自分なりの表し方を見つけていく活動の中で、学びが生み出されていく。その活動の過程において、もう一度考え直したり、じっくり見直したり、周りの友達と関わったりする経験が繰り返されており、その経験の積み重ねが知識や技能となって子どもの身体に蓄積されていく。このような環境との感覚的な触れ合いをとおして、自分なりの表現の課題を生み出していく中で、子どもの本来もつ造形に関する資質・能力が発揮されると共に、育っていくのである。

そこで、本研究では、子どもが自分なりにつくり出したいモノやコトに向けて活動する姿がより豊かに現れるような「造形環境」に着目した。

造形環境の中では、子どもは様々な“気づき”をしながら活動を展開する。それぞれもつ感性を働かせ、目の前で起こるものやことを全身の感覚で受け止め、驚いたり感動したりし、その中で“気づいたこと”を経験として自分の中に蓄積していき、イメージを膨らませたり、さらに創造的な活動をより豊かにしたりすると考える。そのことから、“気づく”ような「造形環境」を設定することが重要であると考えた。

本研究では、子どもの創造性を刺激し、活動が豊かになるような「造形環境」の要素を明らかにした上で、実践と検証を行うことにした。その要素を以下に示す。

①「つくりたい」思いをもてる場であること

活動する中で形や色のよさに気づきイメージを膨らませられる場であることが第一の要素である。また、題材の世界にどっぷり浸ることができたりする場である

ことも大事にしたい。活動する場を屋外にしたり、いつもと違う場にしたりするだけで、子どもは活動への期待感を持ち、始まることにわくわく・ドキドキするだろう。

②友達と必要に応じて関わることができる場であること

図画工作科の時間では、必ずしも協働的に活動していく必要はなく、素材や場、空間と関わる中で、1人で何度もつくり、つくりかえながら活動する姿は、自分の表したいことと向き合っている姿である。しかし、他者と関わることから表現や活動の仕方が広がったり深まったりする場面も大切にしたい。そういったことから、子どもが必要に応じて、他者の表現や活動を見る、話す、時には一緒に活動するなどができる場であること、さらに、他者の活動が自然に目に入る環境であることにも留意したい。

③表現や活動したいことを支える素材や用具が手にとれる場であること

子どもは素材や場、空間などと関わる中で、新たなイメージを膨らませ、自分の表現したいことや試したいことを見つけつつ、試行錯誤しながら思いや考えの実現に向かう。それは、これまでの経験や体験をもとにして、表現を広げたり深めたりしようとしている時でもあると考えられる。その際、必要となる素材や用具などが、手を伸ばすと獲得できるような場にすることで、子どもの豊かな創造活動を支え、より一層促すことができると考える。

④「気づき」を生み出すような場であること

目の前にあるものや起こっていることなどに対して、「この形おもしろい!」「この色の組み合わせ、きれいだね。」「触った感じが気持ちいい!」といったように感じ、「気づく」ことは、「造形的な見方・考え方」を働かせている瞬間であると共に、そこからイメージを膨らませ新たな創造へと向かう入り口でもあると考える。しかし、その「気づき」が難しく、「気づく」ようにすることが大事である。子ども自らが学びをつくり進めることを重視

するといった点からも、子ども自ら「気づく」ことができるような場であることを大切にしたい。

上記のような条件を満たした造形環境を設定した題材開発をし、そこで見られた子どもの姿から、設定した造形環境の要素の有効性について検証していく。

2. 題材の実践報告

本実践は、和歌山大学教育学部附属小学校1年生を対象に行った。

2. 1. 題材について

「ふしぎな“あいらん土”」

研究の実証のための授業として、土粘土を使用した造形遊びによる表現活動を設定することにした。活動は「あいらん土(ど)」というテーマ設定のもと展開することにした。

粘土は指で少し押すとへこみができ、ぎゅっと押すとどこまでも窪んでいきそうなくらいの暗く深い穴ができる。粘土はこちらからの働きかけに応答するかのように形態が変化することから、まるで粘土の素材と対話しているかのようでもある。また、本実践で扱う土粘土は、特有の少しひんやりとした湿り気や弾力などの手触りや質感をもち、子どもは手などから伝わる感覚に心地よさを覚えるだろう。土粘土は、子どもたちの発想に対して柔軟に 대응できると共に、全身の感覚に訴えかけてくるような素材でもある。そのような土粘土の素材自体を味わう造形遊びの活動は、自然体験が十分に行うことのできない環境におかれている子どもたちにとって、本来子どもたちが持ち合わせている豊かな感覚を取り戻すきっかけともなるだろう。

アイランド、つまり島は海底火山の噴火やプレートの移動による隆起などによって、地球から生み出されたものである。本実践で扱う土粘土は地球の表面にあたる大地の一部から取り出されたものであり、その土粘土によってアイランドをつくっていくことは、地球が島々を生み出していく過程を彷彿させることにもなると考える。アイランドは、高くそびえ立つものや平らなもの、また上空から見ると何かの形に見えるものなどがあり、形態

は様々である。そういったことから、アイランドに関する自分なりのイメージを多様に膨らませながら活動を展開することができるだろう。自分なりの「あいらん土」に関するイメージの実現に向けて、低学年の子どもたちは、獲得している「だんご」や「ひも」などといった基本的な技法を活用し、積む、並べる、つなげるといった活動を展開していくことを予想する。

また、活動が進むにつれ、教室のあらゆるところに様々な「あいらん土」ができることから、場や空間に変化が起こる。自分なりの「あいらん土」の活動から離れ、ふと周りを見渡すと、その変化を目の当たりにすることになるだろう。そこでは、場や空間が変化することのおもしろさや、自分や友達がその変化を生み出し続けていることの楽しみを感じることから、新たにイメージを膨らませ、より創造的に活動することになると考える。

また、粘土は形だけでなく量も自在で他の子どもがつくったものとの境界も曖昧であり、イメージの共有もしやすいといった特性をもつことから、それぞれの活動の結果生み出された「あいらん土」をつなげたり、共有したイメージを協働して表現しようとしたりする姿が見られることも予想される。「あいらん土」のテーマにおける子どもの豊かな発想から生まれる活動を、粘土がより一層多様にすると共に支えると考え。

「あいらん土」の題材計画を以下に示す。

題材計画 (全6時間) (評価方法)

第1次 土ねんどとなかよし (2時間)

①、②土ねんどとなかよし (活動の様子、作品)

土ねんどに触れ、全身の感覚を働かせつかんだことからイメージを広げ、活動してみたいことを思いつき試すことで、土ねんどの特質に気づく。

第2次 “あいらん土”をつくろう1 (2時間)

①きょうの“あいらん土” (活動の様子、作品)

素材(土ねんど)や環境(場の設定や友達存在も含む)などからイメージをふくらませ、今日の“あいらん土”にむけて、やってみたいことを試しながらつくる。

②きょうの“あいらん土”の「いいな」をさがそう (活動の様子、タブレットの記録)

自分や友達の活動の成果物を見合い、タブレットで撮影したり感じたことを記録したりするなどし伝え合う。

第3次 “あいらん土”をつくろう2 (2時間)

①きょうの“あいらん土” (活動の様子、作品)

前回の“あいらん土”づくりの活動から、今日の“あいらん土”で、さらにやってみたいことを試しながらつくる。

②きょうの“あいらん土”の「いいな」をさがそう（活動の様子、タブレットの記録）

自分や友達の活動の成果物を見合い、タブレットで撮影したり感じたことを記録したりするなどし、伝え合う。

第4次 こんなところに“あいらん土”！？（1時間＋常時活動）

① “あいらん土”があるとおもしろいと思う場所におこう（活動の様子、タブレットの記録）

第三次の“あいらん土”を屋外に置き、タブレットで撮影したり感じたことを記録したりする。

（常時活動）“あいらん土”はどうなるの！？（活動の様子、タブレットの記録）

自分のつくった“あいらん土”が変化していく様子をタブレットで撮影したり感じたことを記録したりするなどし、伝え合う。

2. 2. 造形環境の具体—“場”の工夫—

活動の場への工夫は、大きく分けて2点行った。

1つ目は、活動の場を一面ブルーの広い空間にしたことである（図1）。



図1 一面ブルーの空間

いつも（普段すごしている教室）とは違う場であるだけで心が弾み、造形への意欲が掻き立てられる。特に一面ブルーの空間は海に見立てることができ、「あいらん土」の世界に浸ることを可能にする。

また、一面フラットな空間であることから、活動の場所を自由に選択でき、活動の形態も流動的に変えることができる。そういったことから、他者との関わりを必要に応じてもつことを可能にする。さらに、時間が進むにつれて、何もない空間に「あいらん土」が出現していくことになる。そういったことから、自分や友達の活動や表現を見て、場の変化や表現のよさに気づき楽しむことを促すと考える。

上記より、図1の場は、先述の要素の①・②・④を満たすと考える。

2つ目は、自由に取れる用具を置いておくことである（図2）。用具は、切り糸・粘土板・霧吹き等の3種である。ただし、これらの用具は、「あいらん土」以前の題材で経験するようにし、その用具の活用方法は学んでいる。粘土ペラを用意せず、使う用具の種類はあえて絞り、土粘土の素材の感触を楽しめるようにした。

切り糸・スプレーに関しては、人数分用意せず、順番を待っている間に友達の活動や表現が目に入るようにした。それにより、これまで蓄積している表現方法を発揮するだけでなく交流できるようにし、表現の広がりや深まりをねらう。



図2 用具の設置

上記により、図2の場は、先述の協働・活用の姿に関わる場の設定条件を満たすと考える。

2. 3. 題材「ふしぎな“あいらん土”」の実際

本実践は「あいらん土」の活動を2度繰り返すことで、自身の表現を見直し、より自分なりの表現へ思いを強めていくということをねらっている。そのため、2度目の「あいらん土」で見られた姿を中心に、設定した「造形環境」の効果について考察する。

本実践において、したいことが思いつかず、手を止めている子どもが見られなかった。

図3中の右側には手のひらで土粘土に触れている子ども、真ん中には足の裏で踏んでいる子ども、左には踵で潰そうとしている子どもの足が見られる。ここでは、全身の感覚を働かせて素材や



図3 主体的に活動する姿

場、空間に関わる姿が見られ、これは、机の上で造形するだけでは見られない活動であり、設定した場がうまく作用していたと考えられる。

また、この横で活動していたグループは、図4のような「あいらん土」をつくり出していた。図4は、どれも同じように

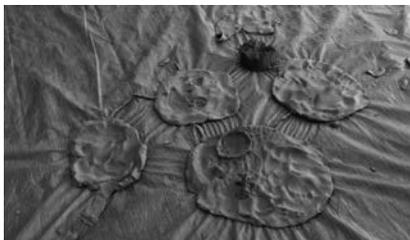


図4 あいらん土

凸凹した「あいらん土」に見えるが、一つ一つに加えた活動が

異なり、「肘で押

した肘のあいらん土」「踵で踏んだ踵のあいらん土」

「足で踏んだ足のあいらん土」である。また、活動途中には「足の指先で押すとおもしろい形になったよ。」

「踵をぎゅっとして捻ると、また違う形になった。」などの声も聞くことができた。これは、図3の子どもの活動が広がり、その活動を試す中でイメージを膨らませ、自分なりに活

動したいことを見つけたと共にその実現に向けて楽しみながら試行錯誤する姿が見られた。



図5 協働的に活動する姿

図5は、図3と

同じグループで活動している様子である。図中右の子どもは、創造的に活動することが苦手な子どもである。しかし、本実践の中では手を止め、自分のしたいことを見つけられず迷うという姿がなく、活動を続けることができていた。

また、グループ内の他の子どもが思いついた活動を見て、「それどうやったん？」と尋ね、真似をして同じ表現を試してみるという姿が見られた。

さらに、ある子どもが、指で粘土の表面をなぞって、模様をつけているのを見て、同じように試す姿が見られた。そこから、自身が加える操作によってできていく形（模様）のおもしろさに気づいたことから、何度も試し、表面に現れる形が次々と変化していくおもしろさや土粘土から指に伝わる感触を味わっている

様子も見られた（図6）。

このような活動の過程を経て、図7の「あいらん土」がつくり上げられていた。一つ一つになっている部分には全て異なる活動の軌跡が残されて

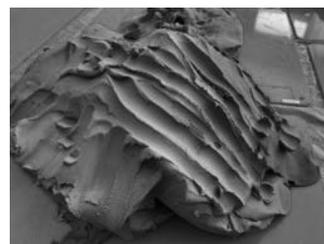


図6 指でなぞることのできた模様のあるあいらん土

いるが、全体としての形態にはまとまりがある。それは、「他者と互いのもつイメージに関する言語を介する対話や、他者の活動やその成果物を見ることによる言語を介さない対話」が行われた結果であると考えられる。活動の形態を柔軟に変化させることのできる場であったことや、他者の表現が常に目に入る空間であったことが、効果的に働いた結果であると考えられる。

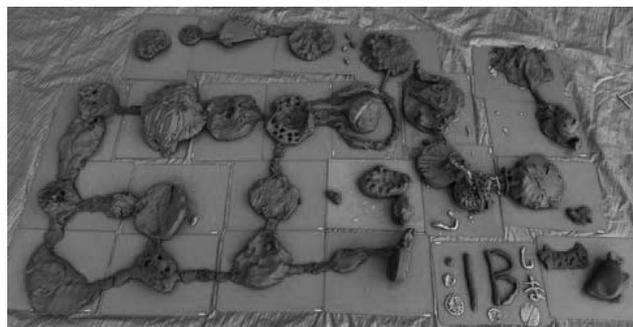


図7 あいらん土2

図8は、あいらん土に指を何度も押し込み、模様をつくっている様子である。

この子どもが、2回目の「あいらん土」以前につくったものが図9である。図9のあいらん土の中央下部にも指を押し付けることでつくった模様が確認できる。さらにその前、土粘土に触れる活動（「土ねん土となかよし」）をした時、残



図8 指を何度も押し込む様子

したものが10である。図10の模様は、

爪を立てて指を押し当てた活動によるものであることから、図8・9とは少し異なる。しかし、指を押し付



図9 図8の子どもがつくった1度目のあいらん土

けることで模様をつくっていくという手法は共通している。図9から図8への変化は、他者からの影響も考え



図10 土粘土となかよしにおける活動の跡

られるが、この子どもが素材と関わる中で可塑性などの土粘土がもつ特質への理解を深め、さらに獲得した知識を活用し新たな表現を追い求めた結果であるともいえる。また、図9ではこの表現が小さかったことに対して、図8では広範囲におよんでいることから、土粘土に指を押し込むことによって自身に伝わる感覚やできる形のおもしろさに気づき、改めてその表現のよさを実感していることも読み取ることができる。

つまり、自己、対象、他者との対話が繰り返される中でもたらされた自分にとって価値や意味のある表現や活動を生み出したという実感が、土粘土の特質などへの深い理解や技能の獲得を促し、自分のもつイメージの実現に向けて既得の表現技法を活かす姿となって表れたのである。また、この姿は、「きょうの」あいらん土」とし同じ活動を2度繰り返したことによって、自分なりの表現を多様に見直すと共に、その表現をより深く追究しようとする中で生まれた姿であるともいえる。

図11は、本時以前の1度目のあいらん土で見られた表現である。このあいらん土は2人の子どもで活動を展開しており、「火山島」をイメージしていたようだ。上部にある紐状のものは、噴火している様子を表しているようだ。また、このあいらん土をつくっていた子どもに、どのよう



図11 1度目のあいらん土

にしてこのような表現を創り出したのか問うと「紐やおせんべいとか色んなのを積み上げた。」という言葉

を聞くことができた。このことは、本題材以前の他の題材をとおして経

験した基本的な技法（ひも・だんご・せんべい・型押し）を習得し、活用できていることを表している。

図11の活動をしていた子どもは、2度目のあいらん土でも同じ2人組で活動しており、活動の結果できていたあいらん

土は図12である。図12のあいらん土について、1人の子どもは以下のように活動を振り返っていた。



図12 2度目のあいらん土

ぼくは、Kさんとつなげた。火山島をつくりました。どうして好きかという、鳥などもつくって、火山の噴火している場所のマグマなどもつくって、川などもあって、ヘリコプターなどもあって、鳥も飛んでいて、水の上のようなものだからです。

上記の振り返りから、2度目も火山島をイメージして活動していたことがわかる。図11では、土粘土のかたまりを重ね、上の部分に紐を重ねるだけのシンプルな表現であったのに対し、図12では、右側には土粘土の表面に指を押し当て何度も滑らせることでつくった水が流れているような表現や、真ん中や左側には紐や団子を様々な方向に向けて複雑に積み重ねられている表現が見られる。図12では、より複雑な活動が加えられていることから、図11の活動からさらに火山島に向けた表現への思いを強め、挑戦していたことがわかる。これは、自分なりに活動したいことへの思いを強めたり考え直したりした結果であると考えられる。

また、図11や図12は、子どもが撮影したものである。図12を撮影した子どもは、他にも違う方向から撮影し（図13）、「どうして好きかという、反対側もおもしろくて、いっぱい作り込まれているからです。」と振り返っていた。作品



図13 上から撮影したあいらん土

のあらゆるところによさを感じていることや「つくり

込む」という言葉をつかっていたことから、細部にまでこだわりをもって活動していたことだけでなく、自他の活動のよさを実感しながら活動できていたことを読み取ることができる。さらに、図 13 以外にも上からや遠くから（図 14）も撮影したものもあり、この行動は、自分の表現を多様に見直し、自分にとっての意味や価値をつくり出していることの表れであると考え

る。図 14 の撮影時には、画面越しに作品を見ながら少しずつ後ずさりし、慎重に写り方を調整する姿が見られた。遠くから作品を見ていることから、ここでは、自分がつくり出した細かな表現や活動よりむしろ場の変化を感じ取っていることが明らかに認められる。図 14 を見てみると、まるで海の中にあいらん土がぼっかり浮かんでいるようである。これを撮影した子どもは、ブルーシートの海の中に、あいらん土が出現した“空間”を楽しんでいるのである。一面平らであった青い空間に、自分や

他者が活動することによって生み出された場の変化を感じ取ったことによる写真であると考え

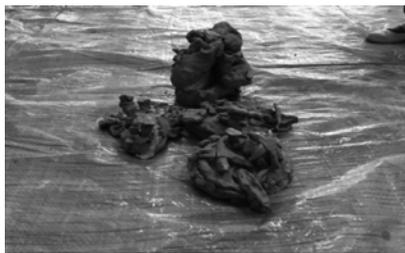


図 14 遠くから撮影したあいらん土

3. 研究の成果と課題

本実践において、授業が進むにつれ、「(土粘土を)もって欲しい。」という声子どもからたくさんあがった。4月当初の粘土遊びでは、生き物や食べ物といった細かな表現をして楽しむ傾向が見られたが、本実践においてたくさんの土粘土を与えてからは、手だけでなく、肘や足なども使い始め、身体全身の感覚を働かせて土粘土に関わる姿が見られた。さらに、自然発生的に土粘土の表現に関する会話が生まれ、協働的に活動する姿が見られただけではなく、自分なりにイメージする「あいらん土」に向けて手を止めることなく活動し続ける姿が見られたのである。

上記の姿から、本研究において設定した造形環境

が、自他の表現のよさや、自身のもつ表現への欲求に気づき、創造的に活動することへの効果があったと考えられる。

一方、表現や活動の鑑賞を十分に行えなかったことが課題であったと感じている。自身の活動結果を撮影し、その振り返りを録音したものを共有するといった活動は後日には設定しているが、その時、その時間感じたことを、実物を見ながら共有することは、やはり価値あるものだと考える。図画工作科では、個で没頭し活動する姿も価値ある姿であるし、もちろん大切にしたい。しかし、価値ある表現を生み出す他者が周りにいるといった環境の中で活動していることから、やはりそれぞれの子どもの表現や活動を広げたり深めたりするためには、他者に目を向けることも重要であると考え

る。今後の課題として、他者の活動や表現を見たり、よさを感じたりすることから、子ども自身が必然性を感じながら共有（鑑賞）するための環境を模索していきたいと考える。

参考文献

- (1) 神林恒道 ふじえみつる 監修(2018)「美術教育ハンドブック」, 三元社
- (2) 永守基樹(2015)「[21世紀型スキル]と美術教育の時間—教育課程構想への美術教育の対応」 「教育美術」第76巻 第7号(第877号) p.34-37, 公益財団法人教育美術振興会
- (3) 阿部宏行(2009)「子どもの発達観から子どもの学びと指導のあり方を再考する」『美術科教育学会誌 30』第50号 p.27-38, 美術科教育学会
- (4) 中川織江(2005)「粘土遊びの心理学 ヒトがつくる、チンパンジーがこねる」, 三元社風間書房
- (5) 真宮美奈子, 竹井史(2018)「『ねんど場』における遊びの様相とその援助—保育教材としての土素材による子どもの学びに着目して—」『美術教育学研究』第50号 p.329-336, 大学美術教育学会